

月を煙たがらせた二本の煙突  
(炭坑節の思い出)

子どもの頃、当時流行っていた「月が出た出た 月が出た・・・」という歌を歌っていたら、母に「子どもが歌うような歌じゃない」と叱られた記憶がある。

月が出た出た 月が出た 三池炭鉱の上に出た  
あんまり煙突が高いので さぞやお月さん煙たかろ

歌詞は一部分しか知らないの、「子どもが歌う歌じゃない」の意味が解らなかった。  
中学生になり高校生になり大人になるにつれて、全歌詞がわかりその意味も解ってきた。

月が出た出た 月が出た (ヨイヨイ)  
三池炭坑の 上に出た  
あまり煙突が 高いので  
さぞやお月さん けむたかろ (サノヨイヨイ)

あなたがその気で 言うのなら (ヨイヨイ)  
思い切ります 別れます  
もとの娘の 十八に  
返してくれたら 別れます (サノヨイヨイ)

一山 二山 三山 越え (ヨイヨイ)  
奥に咲いたる 八重つばき  
なんぼ色よく 咲いたとて  
サマちゃんが通わにゃ 仇の花 (サノヨイヨイ)

晴れて添う日が 来るまでは (ヨイヨイ)  
心一つ 身は二つ  
離れ離れの 切なさに  
夢でサマちゃんと 語りたい (サノヨイヨイ)

実はこの「炭坑節」は民謡として誕生した歌を、替え歌にして赤坂小梅が歌った「流行歌」として売り出したものだった。この歌では三池炭鉱（現在の大牟田市）が舞台となっているが、原曲が誕生したのはこの地ではなく筑豊の炭鉱だった。

1469年に三池の農夫が「燃える石」を発見したことに始まる。のちに柳河藩の手により採掘が始まり、久留米藩、三池藩が採掘を続けやがて官営の炭鉱となった。

1889年に三井財閥に払い下げられて「三井三池炭鉱」として活躍し、1997年に閉山。

1950年代から1960年代には労働災害の発生や労働争議が重なり流血の惨事も発生。当時のことを知る一般国民には、三井三池争議の方が印象強く残ることになってしまった。

赤坂小梅が歌った炭坑節はお座敷歌であり、歌詞を読んでいると民謡すなわち「民謡」からは遠いもののように感じられる。

1980年代になって、福岡市にある九州支店に転勤したことで、久留米、柳川、大牟田は仕事で出向く場所になり「三池」は少し近い存在になった

三池炭鉱があった大牟田は、西鉄福岡駅（天神）から特急で一時間ほど。炭鉱の最盛期には炭坑や炭坑

に関係した企業の労働者がひしめき合い、賑やかだったらしいが、私が見た大牟田の印象はもう炭坑の香りがしない「静かな町」だった。何より驚いたのは三井銀行大牟田支店の建物。地方の中小都市には支店をあまり持っていなかった三井銀行が、三井の炭鉱の町大牟田には石造りの厳めしい支店を持っていた。かなりの人と金が動く街だったに違いない。

やがて炭鉱は閉山して大規模な人口流出があったようで、最盛期の人口は20万人余だったが、現在の人口は11万人。

赤坂小梅が歌った流行歌「炭坑節」の話はここまでとして、福岡在住時代に知ったその元歌たる「正調炭坑節」について触れてみる。

元歌は、筑豊の田川にあった三井田川炭鉱の女性労働者が歌っていた「伊田場打選炭唄」と言われている。伊田の選炭場で働く女性たちの目で見た炭鉱の風景が唄になっている。

香春岳から 見下ろせば  
伊田の豎坑が 真正面  
12時下がりの サマちゃんが  
ケージにもたれて 思案顔 サノヨイヨイ

ひとやま ふたやま みやま越え  
奥に咲いたる 八重つつじ  
なんぼ色よく 咲いたとて  
サマちゃんが 通わにゃ 仇(あだ)の花 サノヨイヨイ

月が出た出た 月が出た  
三井炭坑の 上に出た  
あんまり煙突が 高いので  
さぞやお月さん 煙たかろ サノヨイヨイ

格子窓から 月がさす  
サマちゃんの寝顔の 愛らしさ  
はずした枕を すけさしょか  
思案なかばに 明けの鐘 サノヨイヨイ

三池炭鉱で「燃える石」が発見された1469年から9年後の1478年に、遠賀郡の住民がここでも「燃える石」を発見し、薪より優れた燃料として使われた。やがて筑豊地帯の各地で発見されるに至り、江戸時代には製塩の燃料として福岡藩や小倉藩などが採掘を進めた。そして後の時代の官営製鉄所にもつながることになる。一般に筑豊炭田地帯と言われるが、筑前と豊後の境界に広がる一帯を言う。小倉駅から日田彦山線に乗り紫川を遡って南下すると、やがて海拔300m前後の山に挟まれた谷間に入って行く。分水嶺の金辺峠をトンネルで抜けると遠賀川の源流のひとつである金辺川に沿って下るようになり、周囲の山は海拔500m前後になる。

採銅所駅を過ぎると西側から山が迫ってきて、これをかわすかのように川の流れも日田彦山線もS字にカーブして香春(かわら)駅に入る。この山が香春岳(かわらだけ)で、三つのピークを持つ特徴的な形をした海拔508mの山である。

香春岳の南西に広がる平地は遠賀川がいくつかの流れを集める地点で、ここに伊田の町がある。

田川鉱業所伊田豎坑などの旧施設は、田川伊田駅の南西に石炭記念公園・石炭博物館として残されている。

豎坑櫓の南側に、高さ45mの第一煙突、その隣に高さ45mの第二煙突があり、いずれもレンガ造り

の円筒形の煙突だった。

これらの景色を香春岳から見下ろした様子が、一番の歌詞になっている。豎坑の入口のケージに思案顔でもたれる男の姿が目浮かぶ。



◆田川工業所伊田豎坑跡周辺の風景（福岡県のホームページから拝借）

正面に香春岳（右端の一ノ岳は石灰採掘により海拔 200m程度になってしまった）

中央部に豎坑槽跡 右に二本の煙突 手前に広がるのは石炭記念公園と石炭博物館

歌の中に出てくる「サマちゃん（様ちゃん）」とは、「あなた様」「旦那様」を揶揄した呼び名で、女性労働者の目で見えた「特定の男性」を可愛らしくもじった言葉と言われている。

元歌の二番で「ひと山ふた山み山越え」と歌われているが、この三つの峰を持つ香春岳を歌ったものと言われている。

山奥に咲いている「八重つつじ」の花が、赤坂小梅の替え歌では「八重椿」になっているが、背景や理由はよくわからない。九州の山奥ではミヤマキリシマのようなつつじ系の花が咲いている場所が多いので、椿ではしっくりしない。「奥に咲いたる八重椿」では、やはり都会の座敷唄の域を脱しない。

さて時代は変って 2021 年となり、「石炭は地球環境を破壊する悪」の一つに定義されて国際間でも共有される認識になりつつある。薪から石炭へ、石油・ガスへとシフトしてきたエネルギー源は次の段階へと踏み込むところまで動いてきた。

火をおこすことを知った人間が、山の中で薪に火を付けて燃やしている内に「燃える石」を発見した。

「燃える石」は世界各国で人々の生活の有り様を変えた。

そして今、石炭ばかりか「燃焼そのものが悪」とせねばならぬところまで辿り着いてしまった。

やがては、太陽光や風の力を頼りに熱源・エネルギー源とする暮らしになるのだろうか。人間は、燃焼という過程を経ずに生きていく手段を見つけられるのだろうか。それとも、やがて滅亡への道に入ってしまうのだろうか。

この先、我々の暮らしはどんな方向に向かって行くのだろうか。COP26 で「エネルギー源の将来像」が論議されているさなか、「炭坑節」を思い出したのも奇縁と言うべきかも知れない。

以上